

あ
ら
が
え
な
い
宿
命
を
乗
り
越
え
る
唯
一
の
道



最近新規の読者さんがちょっと増えたこともあり、新しい読者さんだと思うのですが、珍しく「吃音」に関する質問のようなメールが、別々の方から2件くらい届いていました。

これを読んでいる人で、僕と吃音の関係を知らない人はいないと思います。

もう、なんか、AUNの特徴の一つになってしまっているわけですが（というか自分で言いまくっているからなのですが笑）、頂いたメールをキッカケにして色々と思う所があったので、今回は、吃音というものについてこれまで話してこなかったちょっと「深い」話をしたいと思います。

最初に、吃音とは何か、ということを経く話してからどんどん深い所に入っていこうと思いますが、ウィキペディアなど吃音を調べてから読んでみるのもいいかもしれません。……と言っても別に、吃音をもっと多くの人に知ってもらいたいとかそんな話ではないです。

まあ、知らないよりは知っておいた方がいいとは思いますが。と言うのも、実は、吃音者というのは世の中に100人に1人くらいの割合でいて、あなたもこれまでの人生のどこかでできっと出逢っていると思います。

大抵の吃音者は、自分が吃音者であることをバレないように振る舞う努力をしているので、気づかないことがほとんどですが。だから、知らないよりは知っておいた方が、色んな意味でいいのかなあと思うわけです。

が、今回はそこではなくて。

これから僕が長々と執筆しようとしているわけなので、当然、お勉強コンテンツとして成立させます。僕のかつての最大の弱点でありコンプレックスであった「吃音」というものを切り口にして、人生のプラスになるようなお話を提供するつもりです。

例えば、

- ✓ あらがえない“弱み（欠点）”を持っている人
- ✓ 自分には才能も実力も備わっていないと葛藤したり絶望したりしている人

こんな人たちへの、力強いプラスのメッセージになると思いますし、上記に限らず、成功を夢見るすべての人に応用できる成功法則の話ができるはずです。かなり長い話になると思いますが、必ず価値を残せるはずですので、吃音自体に興味がなくても、ぜひ最後まで読んでみてください。

【目次】

1. 吃音とは？
2. 苦悩
3. 原因…「見えない縄跳びの存在」
4. 克服とは？
5. 宿命に生まれ、運命に挑み、使命に燃える
6. 上って「見渡して」みろ！
7. 右脳と左脳
8. 右を見ながら左を見る
9. 左——●——右
10. イカそうぜ

1. 吃音とは？

最初に「吃音とは何か？」について少し説明します。
ここを知らないと話にならないので。

吃音は、傷病認定されているれっきとした病気です。俗語でいうと「どもり」ですが、一般的などもりの解釈は大概間違ってますね。

「ああああああありがとう、みたいな、同じ言葉を繰り返す癖みたいなもの」……こういう解釈をしてる人が多いんですがこれは違います。正しくは、『特定の言葉が「発声できない」症状』を持つ人が吃音者なんです。

「ありがとう」
「こんにちは」
「おはようございます」

毎日どこかで口にする言葉ですよ。

電話がかかってきた時には

「もしもし」
「お電話ありがとうございます」
「はい、〇〇(名前)です」

だと思います。

自己紹介の時には「私は〇〇と申します！」と自分の名前を言うと思うし、仕事では「〇〇会社の～」と、勤め先の会社名を言うことも多いと思います。

これがまともに言えないのが吃音者なんです。

「まともに言えない」というのはたとえば、「ありがとう」と言おうとすると、瞬間的に嫌な感情が湧き上がってきて最初の「あ」の言葉が発生できなくなってしまう。

まるで喉に鍵が掛かったように言葉が出なくなってしまうわけです。無理して発声しようとする息苦しくなり、酷いときは軽い過呼吸状態に陥ってしまうこともあります。この状態を、一般的に「どもる」と言い、「難発（なんぱつ）／ブロック」状態とも言ったりします。「吃る」。これで「どもる」と書いたりもします。

全ての言葉に対してこうではなく、例えば、名前とか会社名とか挨拶言葉とか、日常的に使用する重要な言葉に限って、苦手意識が強く働き発声できなくなる傾向にあります。吃音者によって、言えない言葉のレパートリーはバラバラで個人差があり、軽度の吃音者もいれば、言葉の多くを失ってしまう重度の吃音者もいる。一般的には「克服困難」な病気だといわれています。

吃音者は100人に1人だと言いましたが、3～5歳の急速に言葉を覚える時期において、実に3割の子供がどもりを体験するというデータがあります。多くてビックリなんですけど、ただ、ここでのどもりは、成熟した吃音者のそれではなく、思考と言語のバランスが取れていないことから起こる現象で、そのほとんどは就学前に自然消滅します。

しかし、中にはそうじゃない子もいる。性格だったり、環境だったり、タイミングが悪かったりと、様々な悪条件が重なることで、「どもりを認識」できる年齢までどもりが消滅しないまま成長してしまうわけです。

物事がハッキリと認識できるようになる就学時期にこの状態が構築されてしまうと、もはやどもることへの認識を消すことは難しく、そのような子のほとんどが、吃音者としての一生を余儀なくされてしまうのが現状なんです。

2. 苦悩

『言いたい言葉が突然発声できなくなる。』

非吃音者にはピンと来ないと思いますが、これはかなり辛く過酷な症状です。どれくらい辛くて過酷かと言うと、僕は吃音を克服するための教材を販売していますが、月に一人か二人くらいの人から、

「ちょ、もう、死にたいです」

こんな悲痛のメールが届くほど、です。

だって、ちょっと想像だけしてみてください。例えばですね、学校では、授業ごとに毎回出席確認があると思います。担当の教師が名前を読んでそれに「はい」と答える儀式ですが、なんてことはない、名前を呼ばれたら「はい」と答えればいだけ。なのに「はい」の言葉が詰まって出てこない。無音状態です。

周囲の誰もが変だと思うわけです。「???」と。教師のほとんどが吃音に関しては無知なので、訝しんだり、中には生徒がふざけていると思って怒り出す人も珍しくありません。僕自身、中高と合わせて、4人くらいの教師に怒られたことがあります。「ふざけるな」と怒られてしまいました。

国語の時間の本読みを当てられるとか、多感な時期の幼い吃音者にとっては地獄です。子供はある意味残酷なので、吃音者の子を平気でネタにしたり馬鹿にしたりします。また、進学や就職時の面接なんかは、吃音者にとってとんでもなく高いハードルです。ハンデ以外のなんでもない。

言い出したらキリがないですね。

例えば、ピザの注文とか店の予約とかまず無理。名前が言えないから。電話も最悪のツール。かかってきて取っても、「もしもし」が言えないから。

こういうのが日常なので、大袈裟でもなんでもなく、リアルに、胃に穴が開きます。実際、吃音を苦しめた若い自殺者が毎年後を絶たないのが現状なんです。本当に、哀しい事だと思います。

3. 原因…「見えない縄跳びの存在」

さっきから何度も「100人に1人」と言っていますが、興味深いのは、これが全世界共通だという事実です。日本人だけの話ではなく、世界中のどの国においても、この割合で吃音者がいるという事実。どんな文化、どんな言語の国でも、100人に1人であるという調査・研究結果がデータとしてあります。

原因は諸説あって、例えば、「発語器官などの問題により起こる身体的な病気である」とか、「思い込みやトラウマなどが引き起こす精神的なものである」とか、またはその両方であるとか。

吃音に関する研究は大昔から、それこそ何百年も前からされていますが、これといった原因は明確になっていません。吃音者によって症状や特徴がそれぞれ微妙に異なるため、また、理屈では説明困難な症状が見られたりするため、どんなに仮説を立てても推測の域を出ないのです。

ただ、自分自身の実体験や他者の経験談を元にして、独自に考察し続けてきた結果ですが、僕は、吃音は“100%精神的な病”だと結論付けています。

それを裏付ける理由は色々とあるんですが、わかり易い話を一つ挙げると、

吃音者は、歌では決してどもらない

という、これまた興味深い事実があるわけです。

さっきまでまともに会話出来なかった人が、カラオケで歌いだすとまったくどもらずに歌いきってしまう。不思議なんです。「どゆこと？」ってよく説明を求められます。これについては本当に興味深い話で、また、今回の話の核心に迫る部分でもあるので、後から詳しく話します。

・・・

とにかく、このように、吃音というのは説明すればするほど理解するのが難しい問題です。基本的に、吃音者にしかわからない問題なんです。

そこで、誰にでもわかりやすいように、今からある想像をしてもらいます。いいですか。想像してみてください。

「縄跳び」

縄跳びってありますよね。一人で遊ぶこともあれば、複数で遊ぶこともあるあのロープを使った遊びです。知らない人はいないと思います。

で、複数でやるやつを想像してください。両端で人が縄を持ち、グルグル回すやつです。タイミングを合わせて一人ずつ回る縄の中に入っていくやつを想像してください。

いいですか。入るタイミングを間違うと、縄にひっかかってしまい流れを止めてしまいます。転んでしまう場合もあります。そうならないように、冷静に、慎重にタイミングを図り、「せーの……えいっ！」で飛び込んでい

くわけです。

運動神経にもよりますが、大抵は、慣れると何も考えずに飛び込んでいきます。ただ、慣れて上手になっても、間が空くと感覚を取り戻すのにまた時間がかかると思います。

・・・

なんの話をしているかというのと、要するに「吃音」ってこれと同じなんです。喋ろうとした瞬間、ないはずの縄跳びが突然目の前に現れるんです。

“縄跳びを飛ばない＝発声できない”

という状況に立たされるわけです。

冷静に、慎重に、タイミングを計って発声しないと、言葉が詰まってしまってブロック状態になってしまう（どもってしまう）。上手に飛び込まないと、ロープの回転を止めてしまう。

つまり、会話の流れを止めてしまっただけです。

何度も飛んで慣れてくれば、何も考えずに失敗なく飛ぶことができるようになる。つまり、連続で何本も電話を受けたり、気持ち的にノリノリになってきたりすると、比較的にどもらず、スラスラと喋ることができるようになるってこと。

しかし、時間が空くとまた元に戻ってしまう。

最悪、ロープにひっかかり派手に転んで大恥かいてしまいます。

吃音で言うと、場面によっては、そしてどもり方によっては、立ち直れないほどの心の傷を負ってしまうということです。それが怖くて、ほとんど吃音者は、「縄跳びに参加しない」という選択をします。

出来るだけ会話に入らないようにする、出来るだけ自分が喋らなくてもいいような状態を作ろうとする。また、面接難易度の高い職場を避けたり、社交の場や交際を避けてしまったりする。つまり、コミュニケーションを放棄する方向に行ってしまうわけです。

これはつまり、チャレンジを避けて通るようになるということとイコールだと言えます。

そういうことが日常になってしまうので、いつまで経っても縄跳びは上達しないし、そればかりか、苦手意識が増大してしまい、余計に飛べなくなってしまう。しかも、その縄跳びは多くの吃音者にとって、現実の縄跳びの何倍、何十倍もの難易度であることがほとんどなんですね。まあ、その時の精神状態によって上下はしますが。

4. 克服とは？

「一般的には、吃音は克服困難」ということを前述しましたが、これは吃音者の宿命を背負ってしまった者にとっては絶望的な話で、一度見えてしまった縄跳びが視界から消えることは「一生ない」ということです。

吃音に関しては、「消失する」という意味での克服は不可能です。

ただ、僕自身、「俺は既に吃音を克服している」と言っているし、実際に吃音の克服教材を出しているくらいです。

どういうことか？

僕の場合、「克服」の定義が他と違うんですね。僕の「克服」の定義は、「症状の消失」ではありません。

「問題を踏まえて乗り越える」

ということを、克服だと定義しているわけです。

これについては、関連して物凄く大切な事を伝えたいのでまた後から詳しく話していきます。とりあえず、そういうものなんだとここでは理解して読み進めてもらうとして。

「いくら僕が問題を踏まえて乗り越えるんだ」というような正論を言ったとしても、今まさに苦しめられている吃音者にそれを理解してもらうことはだいぶ難しいわけです。頭で解らせても、気持ちはどうしても納得できない。

しかし、吃音者が非吃音者に戻ることはできません。これが現実であり、どうしても変えられないことです。吃音という道は、一度踏み入れてしまうと、もう二度と引き返せない道なんですね。

だったらその道の正しい歩き方を覚えて欲しい、という話になってくるんですが、これがなかなか、一筋縄ではいかない。羞恥心、孤独感、不安感、恐怖感……こういった感情が普段から同時多発的に生まれていて精神的葛藤が日常化している状態では、問題と冷静に向き合うことは難しいです。

そんな中、「ポジティブシンキング」でも「開き直り」でも「仲間の存在」でも「知識や情報」でも何でもいい、何でもいいんですが、どうにかしてどこかの時点で“光”を見い出せれば、症状を軽減させることは十分に可能です。

また、年齢を重ねるに連れ、苦しみも、葛藤も、あらゆる感情や出来事をニュートラルな視点で冷静に見ることができるようになり、吃音との付き合い

い方が上手になる人も多いです。悟りの境地みたいな所に行ってしまう人もいます。しかし一方で、どこかの時点で闇に飲まれてしまう吃音者もいます。そうすると、本当に困難な人生を余儀なくされてしまう。

能力の問題ではなく、これは本当に、タイミングや運の問題と言わざるを得ません。記憶喪失にでもなれば、吃音もろとも忘れてしまう可能性は高いですが、記憶喪失自体が重大な問題なので話にならないですね。

それはともかくとしても、そもそも吃音者になってしまったのには根本的な原因があるわけです。そういう“資質”を持っていたのです。吃音者でなくても、性格や環境など様々な条件から発動する精神的な不具合が、身体のどこかに症状として現れることは珍しくありません。

例えば、精神的な不具合が「耳」に現れ、難聴になる資質を持っている人がいるように、便秘になってしまう人がいるように、口臭になってしまう人がいるように、痔になってしまう人がいるように、何かのアレルギーになってしまう人がいるように、吃音者は、それが「言葉」に現れる資質を持っていたという話です。

たとえ記憶喪失になっても、遅かれ早かれ、また何かの出来事をキッカケにして、普通では見えない縄跳びが見えてしまうようになります。だからこそ、“問題を踏まえて乗り越える”という、克服の定義を理解することが重要なんですね。

・・・

さて。

もう気づいている人もいると思いますが、ここまで吃音の話
をしているようで実は、どんな問題にも応用できる考え方の

話、高度なマインドセットの話に突入しつつあります。

まだまだ抽象的ですが。

で、勘違いしてほしくないのですが、別に、過去の不幸自慢をしているわけではないし、「俺はこんな大きな問題を乗り越えたんだぞ」とかつまらないことが言いたいわけではありません（苦笑）。

個人的には、吃音はだいぶキツくてゴツい問題だと思いますが、上には上がいきますからね。吃音じゃなくても、不幸・不遇自慢をし出すと足元にも及ばない人たちが、知人・友人に何人もいます。彼らに言わせれば、僕の吃音なんて屁のツッパリにもならんわけです（笑）。だから、自慢とかそんなくだらない話ではないということはわかってください。

誰でも、大なり小なり人に言えない悩みの一つくらい持ってるでしょう。誰でも、大なり小なり、人に言えない「見えないロープ」の存在があると思います。みんな、何かしら悩んでるし苦しんでる。だから、そういう人たちにとっての、何か力強い、心強い解決のヒントになればいいなと思って話をしています。

あなたにしか見えないロープはなんでしょう？
そんなことを思いながら、この先を読んでみてください。

・・・

んでね。僕は吃音者なので、今も、当たり前前に、この縄跳びが見え隠れしてるわけです。僕と会話した事のある人は全員、ちょっと思い出してみしてほしいんですが、あなたと会話しているときも僕は常に、あなたには見えない縄跳びを飛んでいたわけです。

……とか言われたら変な感じがすると思うんですが（笑）、本当ですから。

もう 30 年近く吃音者をやっていると、変な話ですが、吃音のプロになってしまいます。

「あ、この言葉のチョイスはよくないな」「どもるリスクが高いな」という予期不安が瞬間的に発動し、つまりここで認識が働き、それが吃音を招く、結果、自分の首を絞めることになる、と。こういうロジックが働いてるわけですが、生きてる時間が長くなるに連れて、その精度は年々上がってくるんですね。縄跳びがよおく見えるようになってくるわけです。

ただ、一方で、見えた縄跳びの飛び方も上達してきます。こっちの方もプロになってくるわけです。ただしこちらは、勇気の要るチャレンジを人生に果敢に取り入れてきた者だけが許される領域になります。

僕の場合、「吃音縄跳び」の飛び方を究極に上達させた、プロ中のプロというわけです。今となっては、ですが。

かつては、他の吃音者同様、僕にとってもこの縄跳びを飛ぶことはとても難儀でした。ほんの一時期ですが、電話に限ってはほぼ発声不可能という事態にまで陥ったことがあります。

そこから、紆余曲折を経て今に至るわけです。

「縄跳び」に喩えています。実際に頭の中で何が起こっているかというところ、会話中、どこかの時点において「苦手キーワード」に遭遇します。僕の場合、「サ行」や「タ行」に苦手を持っています。遭遇頻度は、喋る時間の長さに比例し、精神状態にも左右されます。遭遇した瞬間、“プロ”である僕の頭の中では、それへの対処作業が首尾よく行われるわけです。

主に、

●言い換え言葉の選定→決定→実行／発声（例．ありがとうございます→感謝してます）

●すらりと発声できるベストなタイミングや 間、ボディランゲージのチョイス（要するに「せーの……ジャンプッ！」のタイミング）

この2つのいずれか、または両方を行っています。

言っている意味がよくわからないと思います。

例えば、僕とあなたが会話しているとします。会話の流れで、「そうですか、わかりました。じゃあその話はまた今度。」と僕が言いたかったとします。しかしその瞬間、「んー『わかりました』って言葉はちょっと微妙だな」という予期不安が発動します。つまり、「わかりました」は言えないかもしれない、ということ意識するのです。

ここまでは吃音者全員同じです。そして、多くの吃音者はそれにやられて無音状態になり、おかしい空気が流れてしまいます。

しかし上手な人ほど、瞬間的に「じゃあここは『わかりました』ではなく、『了解です』に置き換えよう」となり、実際に、「そうですか、了解です。」と言って会話を成立させます。

さらに、その後続く言葉、「～じゃあその話はまた今度」これにも予期不安が働くとなると、すかさず「そうですか、了解です。“ ” じゃあその話はまた今度」と、難なく乗り切ります。“ ” この間に何が起こっているかという、心を整えたり、次の言葉がスラッと出てくるような絶妙な間が作られたりしています。

時間にして一瞬。計測できないほどの一瞬です。1秒かかってないです。だって、ほとんどの場面において、自然で違和感の少ない会話を成立させているわけだから、1秒の何分の1、何十分の1という時間の中でそれは行われているはずなのです。

まあ、要は「慣れ」なのですが、喋ってる間ほぼこの状態なので、割と疲れます。おそらく、普通の人よりもだいぶ疲れると思います。何時間ものセミ

ナーやコンサルの後というのは相当な疲労感で、おそらくここが一番、忘れ物や物忘れが多くなるタイミングですね（笑）。調子がいい時はそうでもないですが、コンディションによってはかなり疲弊します。

・・・

ここまで「吃音」のことを話してきたのですが、少しずつ本題に入りつつあります。

ここからは本格的に、誰も語れないような角度から、成功者の習慣とか思考パターンを紐解いて行こうと思います。

冒頭で言いましたね。

- ✓ あらがえない“弱み”を持つてる人
- ✓ 自分には才能も実力も備わっていないと葛藤したり絶望したりしてる人

こんな人への力強いプラスのメッセージにしていく、と。

5. 宿命に生まれ、運命に挑み、使命に燃える

さて、次の話に移るのですが、その前にここまでの話をまとめますか。

■吃音とは

『特定の言葉が「発声できない」症状』で、特定の言葉に苦手意識を持つもの。「特定の言葉」は人それぞれ異なり、それは年齢や精神状態などの時期やタイミングによって変質する。

会話中などに苦手キーワードを意識してしまうと、瞬間的に嫌な感情が湧き上がってきてまるで喉に鍵が掛かったように言葉が出なくなってしまう。無理して発声しようとする息苦しくなり、酷いときは軽い過呼吸状態に陥ってしまうことも。この状態を、一般的に「どもる」と言い、「難発／ブロック」状態とも言う。

喩えるならば、『見えない縄跳び』。吃音発動の瞬間、吃音者の目の前には、他の人には見えない縄跳びが出現する。

『上手に飛ばないと失敗する＝上手に言い出さないとどもる』

全世界中で100人に1人が吃音者だといわれている。

■苦悩と苦勞

日常生活や社会生活のあらゆる場面で障害となる。精神的な疲弊を常に強いられる。症状の軽重によって異なりはするが、想像を絶する苦悩と苦勞がある。

■原因

諸説あるが、これといった原因は、科学的には解明されておらず、未だ「原因不明」とされている。AUNは、自身の体験や他者の経験談から、100%精神的な病だと結論付けている。『どんなに重度の吃音者でも、歌では決してどもらない』という説明困難な特徴が見られることも、その説の有力性

をバックアップしていると考える。

■克服の定義

一般的には、『克服困難』だとされている。一度見えてしまった「吃音縄跳び」は、一生視界から消えることはない。これには、AUNも同意するところ。

同じ傷病でも、風邪やただの体調不良とは性質的にまったく異なるものである。症状を消失させようとするのは、記憶を消そうとするようなものである。通常、その人にとっての重大な記憶が完全に消え去ることはない。

上記を踏まえて、あえて『吃音の克服』を定義するならば、『問題を踏まえて乗り越えること』である。

・・・

まとめは以上です。

それです、先述した「克服の定義」に注目してみてください。

吃音克服の定義は「症状の消失」ではない。

「問題を踏まえて乗り越える」

ことである。

と言っています。

これは、誰もが持つであろう

“決してあらがえない問題”

すべてに当てはめて考えられることです。

逆に「あらがえる問題」とは何かというと、ここでは「努力して解決できる問題」のことをそう定義したいと思います。

例えば、収入、職業、資格、居住地、時間管理、体調（健康）管理、禁煙、自信等々、「今の」あなたの努力次第で解決する可能性がたぶんにあるもの、いくらでもコントロール可能なものです。

こういうものに関しては、あえてここで言うことはありません。いいからつべこべ言わずさっさとやれ。…ってかんじなわけです。

それはともあれ、考えてみてください。

あなたは、どんなあらがえない問題（消失させることができないもの、変えられないもの）を持っているのでしょうか？何があなたのチャレンジを、チャンス、行動を、やる気を、自信を、満足を、充足を、安息を、幸福を、豊かさを制限しているのでしょうか？

あなたにしか見えない「心の縄跳び」はなんなのでしょうか？

『気に入っていない見た目』

例) 顔の造形、背丈、その他身体局所の造形、etc…

『吃音と比較的類似している精神的な病』

例) 強迫性障害、アスペルガー症候群、うつ病、パニック障害、ADHD（注意欠乏多動性障害）、etc…※ちなみに AUN は「軽い ADHD」だと診断されたことがあります（苦笑）。

『過去の失敗の記憶、トラウマ』

『生まれ育った環境・家族問題』

『男に生まれたこと、あるいは女に生まれたこと』

『年齢』

『死への恐怖』

……人それぞれだと思いますが、これらは要するに

『宿命』

です。

「宿る命」と書いて宿命と読めるわけですが、これは、生まれつき宿っている命という意味です。その人が生きていく上での「前提」となっているもの。基本的に「変えられない」もの。自ら「コントロールできない」もの。

人は皆、年齢にはあらがえしません。生まれてきた瞬間「死」の宿命を背負っています。

僕が男に生まれてきたことは宿命。
日本人に生まれてきたことも宿命。
人間として生まれてきたことも宿命。

そして、吃音者として生涯生きていくことも宿命。

背負った宿命を前提として生きるのが自然なわけです。だから、宿命に逆らった生き方や考え方というのは、良いか悪いかは別問題として、

自然ではないことによってどこかで必ず歪や摩擦が生まれ、
大きくの場合、それは苦しみとなって自分に降りかかってくる

わけです。

話を戻しますが、個人的に「問題」として認識してしまった負の宿命は、あらがうことができない問題として、

“踏まえて乗り越える”

しかないと言っています。

視界から消すことはできないのだから。「努力をするな、頑張るな、諦めろ。」
と言ってるのではなく、

「視界から消す努力をするんじゃなくて、問題を受け入れ、それを踏まえ、
乗り越える努力をしてほしい。それがきわめて自然であり、結果として自
分自身救われるんじゃないか。」

と言ってるんです。

踏まえて乗り越えたときはじめて、「負」であった宿命をプラスに生かすこ
とができるようになるわけです。

自分の意志で変えることができるのは、創っていくことがで
きるのは、宿命ではなく『運命』の方

だと思っています。

「運ぶ命」と書いて“運命”と読むわけですが、これは、自分のチカラで物事を運び、動かし、結果を創造していくことが可能だという意味であると僕は捉えています。

自分の命をどう運んでいくかは、自分自身の意思で決めることができる。自分でコントロールすることができる。

どんな人と出逢い、どんな経験をし、どんな場所へ行き、どんな仕事をし、どんな人格を形成していくか……は、そいつの運命次第だってことです。

例えば、僕があなたにこうしてメッセージを届けられているのは運命です。僕が積極的に自分のチカラを磨き、あなたにメッセージを届けられるような行動をしたから、今この運命に至っているわけです。逆に、あなたが今僕のメッセージを読んでいるのも、あなたが向上心を持ち、積極的に自分を変えようとしたからこそその運命なんですね。

読むのをやめようと思えば、いつだってワンクリックでやめられる。でも、今のところそうはせずに、「読む」という行動を続けてる。そういう行動を取り続けることで、あなたの人格は形成されていき、いろんな経験や出逢いや価値を手に入れることができる。これは紛れもない運命ですよ。

自分に誇れる運命を創っていくことにフォーカスしてほしい

い

と思います。

そのためには、宿命を受け入れ認めることが、第一のステップとして不可

欠だと思うのです。自分が背負った宿命の中に、「これは問題」だと思えるものがあるのなら、何度も言いますが、それを消そうとするのではなく、「踏まえて乗り越える」努力をしてほしいと思います。

僕の大好きな言葉でこういうものがあります。

『宿命に生まれ、運命に挑み、使命に燃える』

これは、元総理大臣の小淵恵三氏が言った言葉ですが、最初にこの言葉を受けたとき、物凄いパワーが自分の中から湧き上がってくるのを感じました。その時は、何が何だかわからなかった。それが何なのかわかりませんでした。

でも、多少自分の想いを言語化できるようになった今ならだいぶわかります。これはきっと、これから僕が何年も、年十年もかけてやっと、自ら到達できるステージの言葉だったんじゃないかと思っています。今の僕にはまだまだですが。

「宿命」とは、宿る命。生きる上での前提であり、変えられないもの。

「運命」とは、運ぶ命。自分の意思や行動で創られるもの。

「使命」とは、使う命。自分で自分に与えた重大な任務。

宿命を受け入れ認めた上で、運命を創る覚悟を決め努力し、その営みの中で自分の使命を知る。『宿命に生まれ、運命に挑み、使命に燃える』まさにこれだな、と。

余談ついでにシェアしておきますが、自分の信じる「美しさ」に共感してくれる人を多く巻き込む努力をすること。さらに、彼らと共に成長し続けていくこと。そして、そのプロセスの中で、成功や豊かさを一緒に手に入れていくこと。……これが、今の僕の使命 (mission) だと思っています。

6. 上って「見渡して」みろ！

「どうすれば吃音がなおりますか？」という質問を一番受けていた頃の僕は、「結局は、人間力を磨くしかない」「結局は、進化するしかない」みたいなことをよく訴えていました。

残念ながら、その意図を十分に伝えるだけの力を当時は持っていなかったため、ただ精神論に聞こえてしまったり、ただ混乱させてしまったり、……ということがあり、その度に悔しい思いをしたものです。

その時の悔しい思いを踏まえた上で、今改めて伝えたいのですが、すべての“あらがえない問題”は、

「今立っている人生のステージを上げる」

ことによって“のみ”解決されます。

“問題意識から解放される”

と言った方が正しいでしょうか。

踏まえて乗り越えた瞬間、“解放”が待っているわけです。

「吃音は大問題だ」「吃音は敵以外のなんでもない」「吃音は諸悪の根源だ」……だから、「吃音は直さなければいけない」「吃音は隠し通さなければいけない」「吃音を消滅させなければいけない」……こんな発想のままでは、つまり「問題」としてしか認識できていないうちは、克服は遠い夢なんですね。

「ステージを上げる」と言っています。

あらがえない宿命を乗り越える唯一の道

まさに立っている場所が今よりもずっと上がって、結果として、問題そのものを「見下ろす」ことができるようになる。問題を見下ろせるくらいの高所まで上り、すべてを「見渡して」みる。こんなイメージです。

「上がる」ための手段は色々です。

身体を鍛えて、見た目にも自信をつける努力をしてもいい。コミュニケーションのスキルを磨き人気者になる努力をしてもいい。リーダーシップのスキルを磨き、人から尊敬される努力をしてもいい。女性心理を勉強して、モテる男になる努力をしてもいい。お金やビジネスの勉強をして、稼げるようになる努力をしてもいい。

なんでもいいと思います。自分や他者に良い影響をもたらし、自然と感謝が生まれるものであれば、どんなことでもあなたの人生のステージを上げることに貢献してくれるはず。注意しなければいけないのは、問題そのものと対峙するような行動を生み出してしまうことです。吃音者だったら、例えば「どもらずに喋る訓練を毎日する」とかね。

これは、問題と対抗し、ただいたずらに戦っているだけです。その頻度を増やしているだけです。いつまでも同じステージに留っていようとする行為に他なりません。多くの人がステージを上げられない理由がここにあります。

その問題が、あらがえないものであるなら、変えられない宿命であるなら、いくら頑張っても向かい合っても消えることはなく、むしろ色濃く強化されてしまうんですね。

自分は他の分野で何を伸ばせるのか？
どんな能力を身につけ磨いていきたいのか？

これにフォーカスする必要があると思います。

かつて、それに気づきつつあった僕は、自分が一流になりたい分野を見つ

け、能力を伸ばし、磨く努力をするようになりました。

さらに、

問題そのものが消えてなくなるわけじゃない。それを問題として認識しない自分に進化するだけ。

ある時から、吃音の克服に対して、こういうイメージを持つようになりました。

そして、

問題が問題ではなくなった瞬間、これまで見えなかった新しい可能性が「必然的に」見えるようになった。

これを、実体験レベルで理解しました。

吃音を問題として認識しなくなった瞬間、色々なものが見えるようになりました。「色々なものってなんぞや？」という話ですが、まあなんて表現したらいいか困るんですが、一言でいうと、

“闇（問題）を、光（魅力）の材料に変える（生かす）アイデア”

かなあ、と。

これが見えだすのと同時に、無意識レベルで気づいたのは、

「ギャップ」といわれるものは、人が本来持つ「魅力」と密接に関係する概念

であるということです。

「ギャップ」というと、ただのテクニックとして語られがちですが、これは、人間なら誰もが持つ「闇」と「光」の存在と、それが価値に変わりうる可能性を示唆した、本質的な概念なんですね。

宿命を選ぶことはできないし、僕なんかでは想像すらできないような過酷な宿命を背負っている人も、世の中に沢山いることはわかってる。だからこういうことをあまり簡単には言えないこともわかってる。でも、あえて言わせてもらおうと、

すべてのあらがえない問題（闇）は、魅力という「光」に変えることが可能

だと信じています。

と言うかですね、そう信じたいんですよ。だって僕自身、そう信じた先に、今まさに現実として生きているかつて理想として思い描いた人生はあったから。吃音克服のプロセスは、僕にとってはまさに、最大・最良のチャレンジであり、最大・最良のチャンスだったわけです。

「どうやれば、私は魅力的になれるでしょうか？」こういう質問をよく受けます。答えはなんでしょうか？問題そのものを消す努力をすることでしょうか？見た目を変えて誤魔化すことでしょうか？……違うと思います。

今の僕ならこう答えます。

あらがえない問題から目を逸らさず、真っ向から見つめ、努力し踏まえて乗り越えた、その先にあるその人が見た新しい価値、その価値を世の中に対して表現したその瞬間の姿。

……これが、その人が持つ本当の魅力です。

綺麗事に聞こえるでしょうか？でも僕は、逆に、泥臭く人間臭い、きわめて現実的な話をしているつもりです。ふわふわしてると感じるでしょうか？でも僕は、ちゃんと地に足着けてるつもりです。

・・・

僕は、吃音というあらがえない問題を通してこのことを学びましたが、もちろんすべてに対して言えることです。これを読んでいるあなたの中にも、きっと何かあるはずですよ。

「お金がなくて困っています」

よく相談されることのひとつですが、たとえこの人に多額の現金を渡したとしても、この人のステージは変わりません。つまり、また同じ問題を抱えてしまうのは明白です。

そうじゃなくて、その人のステージが上がって、お金をコントロールできるようになったり、お金と交換できる価値を自ら生み出せるようになったりすることで、問題から解放されるんです。お金に対する欲望を、完全に消すことはできないかもしれない。でも、お金という存在を上から見渡せるようになることで、問題意識から解放されるわけです。

すると、お金に対してこれまで見えなかった色々な可能性が見えてくる。例えば、自分の欲望を満たし、悩みを解決する道具でしかなかったものが、人を救うことができ、幸福のお手伝いができ、自分を進化させることができる有力なツールとして活用できるようになってくるわけです。

「モテなくて悩んでいます」

という悩みもよく貰うわけですが、これも一緒。

そういう人が、例えば風俗に行って寂しさを凌いだってそれは一瞬のことで、そいつの中の問題意識がなくなるわけじゃない。恋愛や性に対する欲望は、消すことができないかもしれない。でも、恋愛や性というものを上から見渡せるようになることで、問題意識から解放されるんですね。

その結果、また何か新しい可能性が見えてくる（これについてどんな可能性が見えてくるかはちょっと考えてみてください）。

上る努力はしてください。

これはお願いしますよ、マジで。頑張って上っていきましょう。頑張って上って、上りきった！……と思っても、そこはまだ頂上ではないと思います。頂上はもっと先に、上にあるし、生きてる間は頂上には辿りつけないかもしれない。

いや、生きてる限り、頂上自体ないような気がします。でも、現状の問題を見下ろせるくらいの高さまで上ることが絶対にできる。そこまで上ったら、今度はそこから見渡してみてください。見えた景色がすべてを教えてください。そこに答えがあるはずですよ。

7. 右脳と左脳

ここでまた吃音の話に戻るのですが、吃音者には色んな特徴があります。

- ✓ 常に発声に対する予期不安がある
- ✓ 電話が苦手
- ✓ 歌ではどもらない

これについては全吃音者共通の特徴として、このベースの上に、様々な特徴があるわけです。例えば、「人前ではどもるが一人の時はどもらない」という人もいれば、「特定の人の前でだけどもる」という人もいれば、「1対多ではどもらないが、1対1ではどもる」という人もいれば、「普通に生活する分には問題ない、特に不便なく上手にやれるがしかし、●●（特定の言葉）だけは絶対に発声できない」という人もいます。「人前ではどもらないが、一人の時はどもる」という稀有な事例も見られます。ちなみに僕は、後者の辺りです。

とにかく、これらはすべて、自分自身が作りだした“ルール”です。これまでの失敗体験や成功体験によって、「このパターンは大丈夫だ」「このパターンは私にはダメだ」などという試行錯誤を繰り返しながら作ってきたものなんですね。

んで。今回の話で注目してほしいのは、“歌ではどもらない”という一際興味深い全吃音者共通の特徴です。

いきなり少し専門的な話になりますが、『言語野』は、大脳半球の左右どちらかに偏在しているといわれており、9割以上の人で、言語野は左大脳半球にあるとされています。つまり、僕らが日常的に行っている会話は、左脳の働きによるものだということです。

そして、『歌』というのは右脳の働きによる行為です。

あらがえない宿命を乗り越える唯一の道

例えば、僕らが歩くとき、「先ずは右足から踏み出して、その時同時に左手を前に右手を後ろに、次に左足を……」なんてわざわざ考えないですよね？ ちょっとだけ、考えながら歩いてみてください。凄く違和感を覚えると思います。

僕らが、日常で当たり前に行っている行為の中には、「何も考えず自然にやる」からこそ、問題なくスムーズにやれる事が多々あるわけです。『呼吸』もそうです。酸素を吸って二酸化炭素を吐き出すまでの身体の中で起こっているプロセスをすべて思い浮かべながら呼吸してみてください。

「酸素が呼吸器を通り肺に入って、続いて横隔膜が上がって、そして二酸化炭素が……」

……きっと、息苦しくなると思います。

この逸話を読んでみてください。

これは、「百足」と書いて「ムカデ」と読む。この不思議な虫の、苦難の物語です。

ある暑い夏の日、ムカデが一生懸命に歩いていました。すると、通りかかったアリが言いました。

「ムカデさん、凄いですね。百本もの足を絡み合うことなく、乱れる事もなく、整然と動かして歩くなんて、さすがですね。」

その褒め言葉を聞いて、ムカデはふと考えてしまいました。

「なぜ、自分は、これほど上手く百本の足を動かせるのだろうか……アリのさんの言う通り、絡み合う事もなく、乱れる事もなく、なぜ、整然と動

かして歩くことが出来るのだろうか……」

そう頭の中で考え始めた瞬間に、ムカデは、一步も歩けなくなっていました。先程まで、何の苦もなく無意識に動かしていた足を、一步も動かす事ができなくなってしまうていたのです。

【出典：田坂広志『自分であり続けるために』】

『ゴルフスイング』なんかもそうだと思います。いちいち動作を確認したり、それによって身体の節々に力が入っているからこそ、上手くいかないのです。将棋や囲碁なんかも同じことがいえますが、達人になればなるほど、「そのもの」に対する技術や思考力は成長しているはずなのに、なぜか結果に見放されることが多くなるのは、こういうことが大いに関係しています。

『お金』もそうかもしれません。お金が寄ってこない人は、お金に対して、ポジティブ・ネガティブ関係なくあれこれ考えすぎなんですよ。「お金は汚いものだ」とか「お金さん、ありがとう」とか余計なこと考えなくていい。お金の教育というのは本来、お金に対するネガティブな認識を取り除きポジティブな認識を得よう、というのではなく、ニュートラルになるためにやるべきものなんですね。

まあ、言うほど簡単ではないですが。

“きわめて自然に何かを行う”

というのは、何かの分野を極めようとする者にとっての永遠のテーマだと言えるかもしれませんね。

話を戻しますが、吃音者がどもる大きな原因の一つと言えるのは、本来自然に行うべき『発声』という動作を、頭であれこれ考えてしまうからです。

しかし、悲しいかなこれも左脳の働きの一つです。「吃音」という“問題”として認識しているのはある意味僕らの主観であって、本来は、良いも悪いもなく、ただ人間に備わった機能に過ぎないんですね。

で、さらに話を戻しますが、『歌』は左脳ではなく、右脳の働きです。だから、どんなに重度の吃音者も、歌ではどもることはないんです。スラスラ歌うことができます。僕は中学生の頃にこの事実気づき、これを意識して吃音と向き合ってきました。また、吃音者の中には、この特性を利用して「歌うようにして」会話を成立させようとする者もいます。

この発想自体“正解”です。ただ、その試みで自然な会話を成立させるには、何年もの、人によっては何十年もの訓練と幾度ものトライ&エラーを余儀なくされます。今周りに誰もいないなら、試しにやってみてください。たぶん笑えますよ。へったクソな一人ミュージカルになるはずですから（笑）。

まあ、当事者にとっては笑い事じゃないんですが、とにかく、“歌うようにして”自然な会話を成立させる”これはまさに、“右を見ながら左を見る”……ようなものなんですね。

8. 右を見ながら左を見る

わかりますか？あくまで「のようなもの」であって、実際に右を見ながら左を見ることが出来る人はいないと思いますが、そのくらい難しいってことです。

漫画「ナルト」の中の、「螺旋丸」という必殺技を習得するエピソードで、「これをやるのは、右を見ながら左をみようとするものだ」という言葉が出てきました（知らない人ごめんなさい）。

要は、それほど習得難易度が高い技だということですが、“吃音における「歌うようにして」自然な会話を成立させる”も相当な難易度だという事です。でも、不可能ではない。事実、僕は、その感覚の習得に成功しています。

右脳発動状態で、1対1や1対多の会話ができているわけですが、それには秘密があるので、それを話していきます。

...

簡単ですが図にすると、会話している時というのは通常こんな状態です。

左脳●—————右脳

で、歌を歌っているときはこんな状態。

左脳—————●右脳

（極端な話、ですよ。）

んで、要するに、

左脳—————●—————右脳

この状態で会話を成立させるのが、“「歌うようにして」自然な会話を成立させる”ということになってくるわけです。これってものすごく難しいことに思えるかもしれませんが、実は、僕らの凄く身近なところでこれを体現している人たちがいます。

それは誰かと言うと、『役者』さんです。

さっき冗談ぽく「今周りに誰もいないなら、試しにやってみてください。たぶん笑えますよ。へったクソな一人ミュージカルになるはずですから(笑)。」などと言ったのですが、本当に、ミュージカルの応用なんですよ。

ドラマや映画や舞台キャラクターを演じる優れた役者さんというのはみんな、

左脳————●————右脳

これなんですね。

役者に限らず、例えば芸人さんや、ナレーター（朗読する人全般）などもこれに該当します。

役者さんが役を演じているとき、
芸人さんが漫才をしているとき、
ナレーターが心を込めて人のストーリーを語っているとき、
お母さんが心を込めて子供に絵本を読んであげているとき、

左脳————●————右脳

きわめてこれに近い脳の状態だと言えます。

そして、最初に話したような、“きわめて自然に何かを行う”ということにも繋がってくるわけです。もっと言うくと、前の前のメルマガでも話した“上から見渡せ”の話とのリンクしてきますよね。

上から見渡せる景色の質や範囲が広ければ広いほど（物事の抽象度レベルを自由に上げ下げできるようになればなるほど）きわめて自然に、「歌うようにして」会話を成立させる……ことが可能になってくるわけです。

吃音者の中には、「舞台に立って役を演じている時にはきわめてどもりにくい」事に気づく人は少なくないですが、それはこういうことです。これはその人の中で、上から見渡せる景色や範囲が広がったことを意味しています（吃音者の子供が学生時代、国語の授業中に本読みを当てられて大変な目に遭っていたのは、会話脳（言語野／左脳）での朗読を試みていたから）。

ただし、歌のように究極的な『右』ではないため、まったくどもらないわけではありません。多少『左』が入っている割合分の葛藤を消すことは難しい。また、吃音者にとって人前で喋る事自体大変な勇気やチャレンジが必要なわけで、こういう理屈を知ったからといってすぐに出来るような真似でもありません。僕のように、人前でセミナーやったり、テルセミナーやったり、コンサルやったり、独白コンテンツ作ったりするというのは、多くの吃音者にとっては相当にハードルが高いことなんですね（慣れれば大したことないんですが）。

一口に言うと、

“役になりきる”

ことが、どもらず自然に話すことを可能とする一つの有効な考え方になります。僕は、セミナー中は、“セミナー講師”の役になりきっています。子供に本を読んであげているときは、“語り手”の役になりきっています。

ちなみに、こういう表現が正しいかどうかかわからないですが、

“アーティスティック”

な感覚が強い人は、通常の会話でも普通に、

左脳——●——右脳

この状態で喋っていたりしますね。

こういう人には、何て言うかこう、オーラとか熱意とか圧とか、とにかく普通の人には見られない強烈なエネルギー的なものを感じやすい傾向にある気がします。まあ、その人の性格や場面によっては、それが良い方向に働いている場合もそうでない場合もありますが、自らの意思でそれをコントロールできるようになれば最強ですね。

9. 左——●——右

……こうなるための条件をシェアします。
ここで、これまでのすべての話が繋がります。

その前にもう一度確認しておきます。

“これは「吃音」の話ではありません”

すべての人に通ずる成功法則の話です。

この前提に乗っ取ったうえで、自分の状況や環境に重ね合わせて読んでくださいね。

さて、条件は2つです。

条件1：ポジショニング

僕はこの“ポジショニング”という概念をととても大事にしているのですが、これには大きな理由が潜んでいます。

元総理大臣の故田中角栄氏は、知る人ぞ知る吃音者です。彼の喋り方を見ているとわかるのですが、かなり独特です。

参考：<https://www.youtube.com/watch?v=3IICS3Hsyy8>

実は、これには2つの秘密が隠されています。

1つ目。彼は演説時、「まあ、その～」という言葉はかなり多用していたのですが、これは、特定の苦手な言葉を発声する間やタイミングを計っているためです。そして、たまに何かを言いかけたかと思うと、一瞬の沈黙があり（ほんの一瞬）、その後すぐ別の言葉に言い換えをして場を繋いでいるのが、僕であればわかります。

これは、多くの人知らない事実で、「浪花節のユーモア溢れるおっちゃん」程度の認識だったと思うし、仮にそのロジックを説明されたところで、非吃音者には理解できません。

2つ目。彼は、無意識ながら『浪花節が似合い、且つユニークで、気前が良く器の大きい漢』の役になりきることで、

「心は行動となり、行動は習慣を生み、習慣は人格を作り、
人格は人生を決する」

という誰かの名言があるように、長年に渡り実際にそういう人格を構築し

てきたのではないかと。

まあ、2つ目については僕の個人的な推察にすぎませんが、同じ「前に出ていく」吃音者として、そんな風を感じずにはられません。

ともあれ、ですよ。僕は、「理想のオトコ」を演じる努力をし続けたことで吃音を克服しました。忘れていた人も多いと思いますが、前々回のメールで「余談ですが」と言ってシェアした僕の“使命”……

自分の信じる「美しさ」に共感してくれる人を多く巻き込む努力をすること。さらに、彼らと共に成長し続けていくこと。そして、そのプロセスの中で、成功や豊かさを一緒に手に入れていくこと。

こんな風な、“自立したリーダー”が僕の理想です。だから常に、どんな時も、これを演じる“役者”を僕はやめないし、さらに磨いていきたいし、これまでもそんな風にしてですね、まだまだ理想には遠いけれど、現時点での人格に至っているんです。

田中角栄氏に至っては、浪花節を歌って吃音を克服したというわけです。

さっき、「役になりきる」という話をちらっとしましたが、ホント、こういうことなんですよ。

条件2：今ここ

『今ここ』に関しては、他のレポート

『「輝いて見える人」「人を惹きつける人」に共通した特徴』

(http://hq-master.club/HQ-Library/free/shine_attract.html)』

を参考にしてほしいのですが、この『今ここ』スキルがないと、今回の話は成立しません。上に紹介したレポートを既に読んでくれている人なら、言ってる意味がわかると思いますが、とにかく、『今っ、ここっ』なんですよ。

過去や未来に意識やエネルギーを持っていかれているよう

では、最高の役を演じる（歌う）ことはできない。

例えば、役者さんが、舞台の上で役を演じている最中に、借金の事や1年後の生活の事なんかを気にしているでしょうか？……ありえないと思います。僕が、セミナーやコンサルの最中に、全然関係ない好きな女性の事を考えたり、本日の晩御飯何にしようかなあみたいなのを考えたりしていると思いますか？……ありえないです。

上で紹介したレポートに対して、以前こういう意見を貰いました。

今回の「今ここ」っていうのは以前から AUN さんが仰っていたことだったので、僕も心がけてはいるんですが、やっぱり未来に対する不安というか、全力を出して事を成した後が気になっちゃうんですよね。現実的に、たとえば僕が徹夜で学んだことで周りに貢献できたとしても、その影響でいつも滞りなく行っている日常の行動に支障が出るとなると、プラスどころかゼロ評価を通り越して、マイナス評価になってしまうわけです。なら、ほどほどで少し成果がダウンしてでも影響を少なくしたほうがいいんじゃないかと思ってしまいます。

正直、うーん……って感じです。「ここぞ」という場面で全力を尽くした事によって生じる（かもしれない）負の影響とか、そんな事を気にしてたら何もできなくなってしまうでしょう。もし、何かしらの負の影響を一時的に周囲に与えたとしても、それが本当に当人にとっての「ここぞ」であるなら、長期的に考えたとき、絶対にプラスになる。そう信じる気持ちが大切だと思います。

また、短期的にでも、あまりにも大きな負の影響が出そうなら、ちゃんとバランスを調整して、最良のパフォーマンスポイントを見つけるんです。僕がよくいう『関わる人とのWIN-WINの感覚』ですね。

そういうこと全部ひっくるめて『自己責任』なんですよ。成功し続けられる人間は、そういう重箱の隅を突く様な細かい事を行動のブロックなんかには絶対しません。

まあ、この質問主さんに関しては、いつも感想のメールをくれる良い人間だし、たぶん着実に成長してくれていると思うので、これからも頑張ってもらいたいし、期待しています。

・・・

あなたにとって、手を抜いてはいけない「ここぞ」という場面は、『今ここ』を生きるべき場面はどこでしょうか？ 其処にあなたの理想のポジショニングのヒントが隠されているはずですよ。

そして、誰でも知ってるような有名人も意外と吃音者だったりします。

そんな彼らも、

- ✓ ポジショニング
- ✓ 今ここ

を追求することで、見事克服しているわけです。

以下参照です（興味があれば）。

■ブルース・ウィリス／俳優

高校時代に吃音に悩まされるがステージ上では吃音があまり出ない事に気づき演劇部に所属し、生徒会長も努めるほど吃音を改善させた。

■マリリン・モンロー／女優

世界中に知られている20世紀を代表する映画スター。複雑な生い立ちや幼少期の経験から吃音になる。

■ジュリア・ロバーツ／女優

大ヒット映画「プリティ・ウーマン」で一躍スター座にのぼりつめる。子供の頃に吃音で悩んでいた過去がある。

■タイガー・ウッズ／プロゴルファー

世界的に有名なアメリカのプロゴルファー。21歳PGAツアー史上最年少賞金王に輝く。子供の頃吃音があり悩んでいたが飼い犬に話しかけ、ゴルフに集中する事で徐々に吃音を克服した。

■小倉智昭／フリーアナウンサー

朝の情報番組「とくダネ！」の司会者として活躍中。幼少期から吃音に悩み、からかわれていたのが「それを見返してやろう！」とあえてアナウンサーを志す。吃音を克服したように見えるが、普段は吃音ができるようで自ら「吃音キャスター」と名乗っている。

■桂文福／落語家

幼少期から吃音をもっていたが落語の世界に憧れ入門。師匠のすすめで吃音やナマリをそのままだした新作落語に取り組む。

10. イカそうぜ

色々と、長々と語ってきましたが、立派な話でもなんでもありません。僕の場合、ここから逃げるとダメになるんです。

色んな意味で

“自立”するしか、“自分を生きる”手だてがなかった

んです。

ぶっちゃけ、ネタにしています。よく「吃音」の事を話題に出すので勘違いしてる人も多少いるようですが、別に同情して欲しいわけでも気を遣って欲しいわけでもありません。ただ、ネタにしているだけなんです。

「利用」しているんです。
キャラクター作りに利用しているんです。
ブランディングに利用しているんです。
ビジネスに利用しているんです。
好き好んでやっているんですよ。

世界中の吃音者の中でも何本かの指に入るくらい俺は吃音と上手に付き合ってる人間だと本気で思っているんです。あなたが思ってるよりも、僕は凶太く生きてると思っています。

この話の最後に。

あなたにもきつと、何かあらがえない弱みがあると思います。あらがえないんだったら、もうせつかくなんで、利用してください。“生かして”欲しいと思います。

僕は、「ダークサイド」という言葉をよく使いますが、闇を光に変えて欲しいんです。どんな弱点でも、捉え方次第でそれは強みに成りうるし、そのすべてが可能性であると僕は信じたいです。

上手くやれば、ギャップとしてプラスになるし、成長の、進化の、大きな起爆剤にもなる。人に希望を与えることもできるし、大きな影響力を持つこともできる。

すべての弱点は、生かすことができる

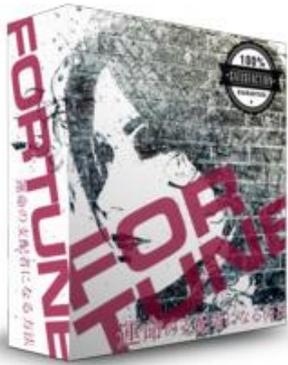
と信じています。

綺麗事だと思われても、もうこの際構いませんが、とにかく希望は持っていたい、持っておいて欲しい。あらがうことができないものであればあるほど、絶望も隣り合わせとしてセットでついてくるかもしれないけど、生かすことさえできればそれはさらに大きな力になり得るんだ、と信じています。

最後まで読んで頂きありがとうございました。

Arigato!★Aun

★このレポートを読まれたあなたにお勧めの製品

**FORTUNE—運命の支配者になる方法—**

自分に都合よく運命をコントロールし、望み通りの理想や成功を獲得することを可能とする4つの奇跡の資質……

1. 他人の能力を最短・催促でパクる資質
2. 思考。妄想を忠実に現実化する資質
3. 結果が出るまで行動を継続する資質
4. 真実の成功習慣を見極め実行する資質

これら4つの資質を手に入れ、確実な進化と成功を手に入れてください。

▶ [製品の詳細はこちら](#)